

将来キャッシュフロー分析の前提

斎 藤 孝 一

現在様々な角度からキャッシュフローが研究されているが、実際にわが国の財務データを使った分析は少ない。以下は、分析を行なう上で前提となる考え方の確認である。

I. 純利益重視の考え方

1930年代以来、貸借対照表から損益計算書に重点が移動したので、純利益の測定が財務報告において重要視されている。

1. 「…1株あたりの利益（特別損益項目前の）は、財務諸表利用者の焦点となる数値である。」

Amir Barnea, Joshua Ronen, and Simcha Sadan, "Classificatory Smoothing of Income with Extraordinary Items," *The Accounting Review*, (January 1976): 110.

2. 「財務諸表ならびにそれに記載されているデータが、ユーザの企業収益力の評価にどのような補助的役割を演じることができるかを見るときに、利益の測定が多分もっとも重要な数値であることが明かになるう。」

Richard M. Cyert, and Yuji Ijiri, "Problems of Implementing the Trueblood Objectives Report," *Journal of Accounting Research*, 12 (Supplement 1974): 36.

3. 「利益の測定は、資産と負債の視点からの論者および収益と費用の視点から論者双方に財務会計の焦点であると考えられている。」

Financial Accounting Standards, *Scope and Implications of the Conceptual Framework Project*, (Stamford, Connecticut: Financial Accounting Standards Board, 1976), p. 20

4. 「企業利益は、財務諸表によって伝達される情報の焦点である。」

FASB, *Scope*, p. 26.

II. キャッシュフロー重視の考え方

これに対して、次のようにキャッシュフローを重視する考え方がある。

5. 「…投資家に対する理想的な状況は、将来キャッシュフローに関する知識の提供によって達成される…」

Joseph G. Louderback III, "Projectability as a Criterion for Income Determination Methods, *The Accounting Review*, 46 (April 1971): 299.

6. 「高い株価の最も重要な決定要因は、現金収入から営業上の現金支出を差し引いて測定される総資本利益率である。(しばしば、会計上のフィクションとして株式市場では大いに無視されている純利益や1株当たりの利益とは混同してはならない。)」

Joel M. Stern, "Manager's Journal," *The Wall Street Journal*, 27 (March 1978): 18.

III. キャッシュフローへの批判

7. 「(1)損益計算書は唯一の(あるいは少なくとも主要な)会社に関する情報源である。(2)債権者と株主は、報告される利益にしたがって会社に投資する。たとえば、1株当たりの報告利益が高ければ高いほど、株価は高くなり、資本を増やすことが容易になる。…」

Charles T. Horngren, Financial Accounting Standards Board Statement No. 19.

8. 「会計上の変更がキャッシュフローの基本額およびタイミングに影響を持たないときには、経済実体を欠いている。」

Charles T. Horngren, "Oil Accounts Should Be Uniform," *The Wall Street Journal*, 31 (March 1978): 16.

IV. 会計目的に対する明確な同意、会計理論と会計実務のコンフリクトの認識

9. Study Group on the Objectives of Financial Statements, *Objectives of Financial Statements*, (New York, New York: American Institute of Certified Public Accountants, Inc., 1973). pp. 36–37.
10. FASB, *Tentative Conclusions on Objectives of Financial Statements of Business Enterprises*, (Stamford, Connecticut: FASB, 1976), pp. 53–58.
11. Financial Accounting Standards Board, *Statements of Financial Accounting Concepts No. 1* (Stamford, Connecticut: Financial Accounting Standards Board, 1978) pp. 1–2.

V. 純利益測定の批判

12. 「…会計担当者のイマジネーションの作り物と呼ぶのはひどい。…しかしそれは確かに会計担当者の儀式的産物である。」
- Kenneth E. Boulding, *The Skills of the Economist* (New York, New York: Philosophical Library, Inc. 1958), p. 56.
13. 「会計担当者が実際に求めているのは正しい答というよりも十分な答である。しかし、このような場合、会計担当者の答が何を意味するかを知ることが重要であり、どのような手続きを使用したかを知らねばならない。」

Kenneth, E. Boulding, The "Economics and Accounting: The Uncongenial Twins," *Studies in Accounting Theory*, eds. W. T. Baxter and S. Dabidson (Homewood, Illinois: Richard D. Irwin, Inc., 1962), pp. 53–54.

VI. 純利益の4つの尺度についての議論

14. Roberts Sterling, *Theory of the Measurement of Enterprise Income* (Lawrence, Kansas: University of Kansas Press, 1970), pp. 12–18.
15. Eldon S. Hendriksen, *Accounting Theory*, 3rd ed. (Homewood Illinois: Richard D. Irwin, Inc., 1962), p. 140.

VII. 純利益測定の5つの論拠

16. 「…次の25年は引き続き純利益測定の初期であったと思うかも知れない。」
David Solomons, "Economic and Accounting Concepts of Income," *The Accounting Review*, 36 (July 1961): 383.

VIII. Trueblood Study Group と FASB

17. The American Institute of Certified Public Accountants によって Trueblood Study Group のメンバーが学界および産業界から選ばれた。
18. Financial Accounting Standards Board は1976年12月に *Tentative Conclusions on Objectives of Financial Statements of Business Enterprises* を発表した。会計理論に対する FASB の見解であるが、The Trueblood Study Group の大きな影響がみられる。*Statement of Financial Accounting Concepts No. 1* において FASB に採択された。
19. スタディグループは、投資家は投資から受けとると期待されるキャッ

キャッシュフローに関心があるということを前提とし、財務諸表の目的は投資家や債権者が投資から期待されるキャッシュフローを評価するのを助けることであるとした。キャッシュを生み出す能力は企業の収益力と定義され、キャッシュを生み出す企業の能力を予測し、比較し、評価するにあたっては、純利益の測定が有用であるとした。

Study Group, *Objectives*, p. 37.

20. FASB も純利益を正味キャッシュフローのインジケータとした。

FASB, *Conclusions* p. 5.

FASB, *Concepts No.1*, pp. 1-31.

IX. 問 題 点：

21. 投資家が企業の将来正味キャッシュフローに関心があるならば、なぜ企業の正味キャッシュフローを報告しないのか？ 会計プロフェッションと企業は、多くの注意を純利益に集めるのか？ キャッシュフローを発生主義会計から予測することの方がより容易である。

Kenneth S. Most, *Accounting Theory*, (Columbus, Ohio: Grid, Inc., 1977), p. 137.

X. 理論の確認と同意 validation

22. 理論の確認と同意がないならば、競争理論間の選択は不可能でないにしても、困難である。確認と同意のプロセスとして会計尺度と正味キャッシュフロー間の組み合わせを考察する。

(1) 純利益は現在のキャッシュフローよりも強く将来のキャッシュフローにより強く結びついているのか。

(2) 他の会計尺度は将来のキャッシュフローに強く結びついているのか。

John H. Fisher "Net Income As An Indicator of Future Net Cash Inflows

From Operations” (1980)

XI. わが国の財務データ分析に使用する尺度

1. 営業利益
2. 経常利益
3. 当期利益
4. 正味運転資本
5. 当座資産
6. キャッシュフロー（当年度税引利益＋減価償却実施額－配当金（中間配当額を含む）－役員賞与）

XI. 分析に用いる統計的方法

1. パラメトリック：重回帰分析（ステップ・ワイズ法，ダービン＝ワトソン検定等を含む）
2. ノンパラメトリック：ウィルコクソン検定

なお，分析の方法と結果については，日本会計研究学会第52回大会にて行う。